

令和4年9月総評

西躰 かずよし

今月は明るいトーンの作品に惹かれた。またこれまで目に留まらなかった新しい書き手にも出会えた。そうした出会いを大切にしたい。

封筒にどんぐりいれてみる眠る

大橋 弘典 群馬県

封筒にどんぐり。それは童話のはじまりを想起させるけれども、『いれてみる眠る』の一節で風景は一変する。封筒にいれるという何気ない行為が、永遠の眠りへとつづく入り口のようにも見える。

フラスコに走り書きした夏

まちりこ 埼玉県

フラスコに走り書きなんてできそうにないけれども、夏ならそれができそうな気がするのは何故だろう。忘れていた夏のちからがもどってくるように思えるからだろうか。

あ、い、う、え、お  
がぜんぶ音楽になる鳥

旭日 百 滋賀県

ひらがなが音楽になる鳥がいると考えるだけでもわくわくするけれど、そのまま書くとなると少し恥ずかしい。けれど恥ずかしいくらいが丁度いい。そうした思い切りの良さが作品に表れている。

ホルンの曲線  
ぼくは立ち上がる

立花ばとん 東京都

ホルンの曲線という不可解な理由で立ち上がるぼくは大真面目である。だからこそ滑稽で、主人公への共感が湧く。他人にはわからないようなことでも、それが立ち上がる勇気につながるのだってあるのだ。

わり算の  
あまりのように  
佇んで

広田 土 大阪府

割り算のあまりはどこかさみしそうで、たたずむ君も同じくらいさみしい。

流れ星  
ですから兄は派遣社員

折田 日々希 神奈川県

流れ星。そしてそのあとにつづく行替えの沈黙が美しい。兄への深い眼差しがこの作品を生んだのだと思う。

啜るよにフリスクたべるおじさ  
んのカフスポタンを眺める車内

小林奔 神奈川県

氏の持ち味は作為的でないところだと思う。どこかぶっきらぼうで、ほかの『ロマンスカーすまして田圃を横切／った当たれば死ぬしかない速さで』といった作品でも同様の印象を受ける。語り手自身をとおくから見つめるまなざし。主人公の息遣いはそのまなざしによって支えられている。

廃番のチークみたいな秋夕焼

あお 奈良県

チークと秋夕焼というというありきたりの組み合わせが『みたいな』ということばで、生き生きとしたものになる。確かに昔そんな夕焼けを見たような気がするのである。

弟の虫の形の声を聴く

田崎森太 東京都

もう届かない弟のことばは、虫の形の声になるほかないのだろう。そしてたとえ虫の形でしかなかったとしても、もう一度弟の声を聴きたいという願うのだろう。

夕立の一粒ごとにある鏡

吉沢 美香 宮城県

作者は通常ではイメージしないような情景を描く。それは『一粒ごとにある鏡』であったり、『十月の靴の下敷ふわふわふわ』という作品であったりする。あたりまえの光景が作者の発見によって、新しいものに生まれ変わるのである。

めだかって書いた名札と夏の雨

藤田 ゆきまち 三重県

名札は通常固有名詞を書くものだから、めだかと名札に書いたのは、めだかになみなみならぬ愛情があったからなのかもしれない。名札にふりかかる夏の雨が美しく表されている。

バス停の「松本さん家前」小春

玻璃 愛媛県

『「松本さん家前」』。もし、そんなかわいい名まえのバス停があったら行ってみたい。小春もなんだかうれしそうである。

褒められるのきらい

秋雨に打たれたい

日下部 友奏 群馬県

私はもうこんな風には決して書けないが、作品にことばをまっすぐぶつけることができるというのはひとつの美点だと思う。『褒められるのきらい』ということばは書き手の純粋さに由来するのだろう。